

特定外来生物

産業管理外来種

重点対策外来種

# モウソウチク

学名 *Phyllostachys heterocykla*



一般にタケノコというとモウソウチクのことを差し、それ以外のタケノコはマダケやハチクなど植物名で呼ぶことが多いようです。食用として現在も各地で栽培されています。日本の竹の中では最も大型に成長します。竹は地上に出ると太く成長することがなく、タケノコとして出てきた太さで竹の太さが決まります。

中国江南地方原産で、1000年以上前から徐々に輸入されてきましたが、全国的に広まったのは江戸時代中期以降のようです。

繊細な細工物の素材としてはマダケに劣りますが、金属製品やプラスチック製品が普及するまでは建築材料、農業資材、漁業資材などとして用いられてきました。このように手軽に使用できることから、各地で農家の裏や耕作地の周辺などに植栽され、竹林として維持・管理されてきました。

## 影響

モウソウチクは地下茎が伸び、そこからタケノコを生やすことで群落の面積を拡大させていきます。はじめは家の裏山の一角に植え、毎年利活用することで規模を維持されてきた竹林も、人の管理がなくなると群落がどんどん大きくなり、周囲の広葉樹林を飲み込みながら山全体に広がっていきます。広葉樹の高木層は12～15m程度のものが多く、モウソウチクがそれを超える高さに伸びることで日照を独占し、影となった樹木が枯れていくのです。樹林が失われるとそこに生息する生物相も生息環境を失い、単一的な竹林だけが残ることになります。

管理されていない竹林は枯れた竹が複雑に混み合い、人が入っていくことも難しくなります。また、竹自体が細くなるので、大きなタケノコも取れなくなります。

モウソウチクの地下茎は頑丈なように見えますが、地面の表層50センチ程度に集中していて地中深くには入っていきません。このため、樹木の根のように山の土を保持する効果は少なく、大雨のときはモウソウチク林ごと地滑りを起こすこともあります。



樹林に侵入



手入れの行き届いた竹林



荒れた竹林



山を飲み込む竹



外来生物マニュアル特設ページ（他の外来生物の写真や音声などもご覧いただけます）

# 駆除の方法

群落を除去するには、平地で低密度の竹林であれば竹を伐採して重機で地下茎を掘り起こすことで根絶できます。斜面地や高密度な群落の場合は竹を全面的に伐採することを数年間継続して、光合成を立つことで地下茎を枯らしていく方法が考えられます。

竹林が拡大することで生じる生態系は広葉樹林のものより貧弱です。竹の活用できる量を考え、それを超えて拡大している部分については駆除を考えましょう。



掘り起こし作業



モウソウチクの地下茎

# 注意

モウソウチクは全て人が植えたものが起源になります。竹林は民有地が多いため、駆除や採集には土地所有者と調整が必要です。また、竹林が無秩序に拡大していると土地の境界がどこまでかわかりにくくなっていることもあります。

モウソウチクは重く、伐採には危険が伴います。特に、混み合った竹林では伐採時に必ず掛かり木になる他、樹冠で枯れた竹が突然落下してくることもあり、注意が必要です。



伐採のようす

注意

# 利活用

4月から5月にかけてタケノコとして炊き込みご飯や煮物など、美味しく食べられます。

モウソウチクは竹材としては肉厚で堅く、マダケのようなしなやかな竹籤ができません。土留めや花瓶、竹ぽっくり、竹炭、炊飯、竹灯籠などに活用できます。毎年生えてくるので、群落の拡大と伐採の量が同じ程度か伐採が上回る程度に、毎年多量に使える方法を考えましょう。



タケノコ

# よく似た在来種

## マダケ 在来種

古くから栽培され、多数の品種があります。原産地は中国とも日本とも言われ、はっきりしたことはわかっていません。モウソウチクは節の隆起線が1本なのに対し、マダケは2本あることで識別します。様々な竹細工の原料として活用されます。モウソウチクのように人が植えた場所でも、休耕地への侵入が旺盛で、モウソウチクより細く密集した群落を作ります。

## Which is it? マダケとモウソウチクの見分け方



マダケ

・節の隆起線が2本



モウソウチク

・節の隆起線が1本



竹あかり



竹の垣根